
マリーゴールド号の悲劇

深川辰巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリーゴールド号の悲劇

【Nコード】

N8546H

【作者名】

深川辰巳

【あらすじ】

嵐にあって航行不能になったマリーゴールド号。若い兄弟の航海士がそこで見た悲劇は……。

（前書き）

猟奇的表現を含みますので、苦手な方はご注意ください。

他の作品とはかなり作風を異にしています。

マリーゴールド号船長航海日記より抜粋

九月十五日

嵐に巻き込まれマストが折れる。

九月十八日

嵐は過ぎ去ったが、航行不能。漂流開始。

九月二十八日

恐れていたことが起こった。救助がないままに、食糧が尽きる。水も残りわずか。

九月三十日

乗組員達が暴徒と化し船長室に押し寄せてきた。

今は扉を堅く閉めて難を逃れているが、いつまで持つだろうか？
扉が破られた後に私にはどのような運命が待ち受けているのだろうか？

航海日記はここで終わっている。

「兄さん……」

「アンドリユー、見たらだめだ。あれは人の仕業じゃない」

船長室の外で、キリーは震える弟のアンドリユーを抱きしめた。

扉を破壊した斧が振るわれる度に、鈍い音と船長の叫び声が聞こえてくる。

「ぎゃはは！ 船長！ あんたが能なしだからこんな事になったん

だ！」

斧を振るっているボブの半狂乱的な言葉が周囲の乗組員達に伝播していく。

「そうだ！ 責任を取れ！」

「いいぞ！ やってしまえ！」

船長の動きが止まっても、狂気は留まることを知らない。

ボブの振るう斧は

両腕を

両足を

頭部を

それでも飽きたらず、各部位を細切れにしていく。肉がちぎれ、骨が砕け、血が飛び散る。

「こんなもんか？ いいぜ、食っちゃおうぜ！」

ボブの合図を皮切りに、今度は狂気の饗宴が始まる。

「兄さん……」

「アンドリユー、見るな、聞くな！」

あちらこちらで始まる肉を咀嚼する音。

キリーはアンドリユーの耳をふさいだが、すっかり青ざめていることに気づいた。

「キリー、アンドリユーなにやってんだ。お前達も食えよ。子供だからって遠慮することはないぜ？」

この船の最年長サムだ。まだ二十に満たない兄弟がマリーゴールド号に乗るようになってから何かと面倒を見てくれた。

この船における父親のような存在だった。

そんな彼が笑みを浮かべながら、手に赤い色をした何かを持って近づいてくる。

「あ、あ……」

「ほら、お前ら食べ盛りだろ、しっかり食べると良い」

サムは笑った瞳の中に暗い光がある事にキリーは気付いた。

「あ、ありがとう」

キリーが受け取り、アンドリユーの口へと運ぶ。

「食べる、アンドリユー」

「え？」

「食べなければ……次に食べられるのは、俺達だ」

キリーはアンドリユーの耳元でささやく。

「い、嫌だ……食べるのも、食べられるのも……」

「嫌でも……食べ。生きるんだ！」

キリーは固く閉じられたアンドリユーの口をこじ開けて、無理矢理肉を詰め込んだ。

はき出さないように口を手で塞ぎ、飲み込むのを確認する。

「げほ！ げほ！」

むせるアンドリユーを尻目にキリーはサムに向き直る。

「サム、もっと食べて良い？」

「もちろんさ。まだまだ肉は有るからな」

「まだまだな！」

サムの言葉に相づちを打つようにボブが斧を持ち上げた。

「兄さん、船乗りって良いね。力仕事は大変だけど、海の上をこんなに早く走れるなんて！」

「だろ？ でもびっくりだな。お前まで船乗りになると言い出すなんてな」

青空の下、穏やかな海を駆け抜けるマリーゴールド号の甲板で二人は休息の時間を楽しんでいた。

「兄さんと一緒に働きたかったんだよ」

「お前なあ、恥ずかしい事言うなよ」

キリーが赤くなつて頭をポリポリとかいていると、サムが近づいてきた。

「兄弟仲良くて良いことだ」

「あ、サム。弟も乗せてくれてありがとうございます」

「儂が決めた訳じゃない。船長だ」

「でも船長に口添えしてくれました」

「何、一生懸命なアンドリユーを気に入っただけだ。しかし、まだ十五だったか？ 海は穏やかなときだけじゃないぞ」

「大丈夫です。何があつても頑張ります！」

「ははは！ 時化の時にも同じセリフが吐けると良いな！」

サムは思いつきアンドリユーの背中を叩いて去つていった。

「兄さん、やはり大丈夫じゃないよ」

「弱気になるな。ほら、次の食事が来たぞ」

「今度は誰？」

ボブが右手に斧を、左手に肉の塊を持って兄弟の所へやってきた。「すまないな。今度の肉は一番時間が経っているから固くて美味くないかもしれない。だがお前らしっかり食えよ」

「一番時間が……」

「経っている？」

二人の脳裏にサムの笑顔が浮かぶ。

「兄さん……」

「泣くな、弱気になるな。食べ、食つて生き延びるんだ」

キリーはボブから肉の塊を奪い取ると噛みちぎって、アンドリユーに差し出した。

「ははは！ 分け前が増えたからたつぷり食べる事ができて良いだろっ？」

ボブの笑い声がどこか遠くに聞こえる中、二人は咀嚼を続けた。

「兄さん……僕はもうダメだと思う」

「弱気になったらダメだと言っているだろう。しっかりしろ!」

アンドリユーの頬を軽く叩くが、もはや感覚がないかのように応がない。

「僕が死んだら……」

「止める」

「僕の体は兄さんが……食べて」

「止めると言っているだろ」

「あいつらに食べられるくらいなら……兄さんに……」

「ダメだ。起きろ!」

「……………」

「おい!」

体を揺すっても叩いても反応は全くなかった。

「死んだか?」

「死んだな」

「一番若い肉だ……」

「きつと美味いぞ」

「さあ、キリー。アンドリユーの死体をよこせ」

ボブがキリーの肩に手をかける。

「止める! アンドリユーは渡さない!」

キリーはボブの手を払いのけた。

「なんだって?」

「こいつ独り占めする気だな」

「そう言えば、アンドリユーは『兄さんが食べて』とか言っていたぞ」

「おい、キリー。今までもみんなで仲よく分けてきたじゃないか。俺達は仲間だろ? 海の上で独り占めなんかしていたら、生きていけねえぞ?」

「アンドリユーに手を出すな」

壁際に寝転がるアンドリユーをかばうように手を広げてボブ達の前に立ちふさがる。

「なあ、この船の掟を知っているか？」

「手に入れた財宝は皆で山分けすること、だ」

「独り占めした者には死を！」

「キリーに死を！」

「ボブ、遠慮はいらねえ！ やっちまえ！」

「おう！」

「あ、ぐわ！」

斧による頭部への一撃。

キリーはそれだけで気を失ってしまった。

気がつけば、たまたま通りがかった船によって僕は助かった。

他に生き残りは居なかった。

ボブに斧で殴られた後、何が起こったのかは分からないがここからは想像だ。

僕が気を失ったのを死んだと勘違いして、すぐに噛みついたのだろう。事実腕などに噛みついた跡があった。

だが、僕とアンドリユーの肉を独り占めしようとした者が現れた。

僕の周りにはお互いが争った形跡があったのだ。

だが、弱った体での殴り合いの果ては、お互いに力尽きるという結果を迎えたのだ。

「遭難したマリーゴールド号からの唯一の生還者……は、人の肉を食べた悪魔だった、か……」

この事故は今でも時々思い出される。

そのたびに悲しさと吐き気が襲ってくるのだが、それでも良い
と思っている。

弟の死を忘れていないという証でもあるから……

（後書き）

いかがでしたか？

悲劇・恐怖……そういったものが表現できていたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8546h/>

マリーゴールド号の悲劇

2010年10月26日14時27分発行